

# 關於日語實現可能句型之句意探討 — 以否定句型為中心 —

林青樺

淡江大學日本語文學系助理教授

## 摘要

本論文係以事象的樣態以及主體的意志性之關聯來考察實現可能句型之否定形的句意。實現可能句型的否定形，在先行研究當中一直都被認為是表達以主體意圖為基礎，或是期待實行之行為未實現之意義。然而，從本論文之考察結果得知，實現可能句型的否定形除了表示否定其肯定形句意之〈意圖性行為之不成立〉之外，也有表示〈心理抗拒導致之事象不成立〉以及〈歸結性的事象不成立〉的情形。因此，從本論文的探討結果發現，實現可能句型的否定形不僅僅是只有否定肯定形之句意模式，藉由透過「否定」這樣的語法呈現方式，反而能衍生出在肯定形中所無法表達的句意。由此可指出，實現可能句型的否定形和肯定形在意義上並非相互對應。此外，關於實現可能句型和自發表現之間的差異，不僅只於主體是否有執行該動作之意圖，而是在於事象是否實際成立亦或是不成立之可能性上。

關鍵字：可能表現、實現系、否定形、意圖性行為、自發表現

# **A Study of The Semantic Analysis of Actual Potentials in Japanese:On Negative Sentences**

LIN,Chin-hwa

Assistant Professor, Tamkang University

## **Abstract**

This paper describes the semantic analysis of negative actual potentials that express event occurrence once in modern Japanese with the viewpoint of the intention of the subject and the way of events. The conclusions are as follows.

- (1) First, it was shown clearly that the meaning of negative potential sentences is not only [un-attaining of desirable event] that just denies the meaning of affirmative sentence, but also [event un-attaining by psychological element] and [conclusive event un-attaining].
- (2) The negative sentence of actual potentials have the meanings that the affirmative ones not show, so we can say that negative sentences have the function of draw out the meanings that affirmative sentences never means.
- (3) The difference of actual potential and spontaneous constructions is the intention of the subject discussed by previous research. The consideration result of this paper shows that the more important difference of actual potential and spontaneous constructions is the way of recognition that means the possibility of event.

Key words: potential sentences, actual potentials, negative sentences, Intentional act, spontaneous constructions

# 日本語における実現可能文の意味について －否定形を中心に－

林青樺

淡江大学日本語文学系助理教授

## 要旨

本論は、事象のあり方と主体の意図性との関わりから、実現可能文の否定形の意味を考察したものである。実現可能文の否定形の意味は、従来、主体の意図に基づいてまたは期待して行なう行為が実現しなかったという意味を表わすものとして捉えられてきた。しかし、本論の考察結果から、実現可能文の否定形は、肯定形の意味を打ち消す〈意図的行為の不成立〉だけでなく、〈心理的拒否による事象の不成立〉と〈帰結的な事象の不成立〉という意味を表わす場合もある、ということが明らかとなった。つまり、実現可能文の否定形は、肯定形の意味を否定するパターンだけでなく、肯定形では表わせない意味まで引き出せるのである、ということになる。このことから、実現可能文の否定形は肯定形と意味的に対応していないということを指摘することができた。また、実現可能文と自発表現との違いは、主体が意図したかどうかということだけでなく、事象が実際に成立し得るかどうかという事象成立・不成立の可能性といった事象の捉え方にあることが明らかになった。

キーワード：可能表現、実現系、否定形、意図的行為、  
自発表現

# 日本語における実現可能文の意味について — 否定形を中心に —

林青樺

淡江大学日本語文学系助理教授

## 1. はじめに

現代日本語における可能表現は、アスペクト的側面から、状態的な意味の様相を帯びる、ポテンシャルな用法としての潜在可能文と、一回的な行為の実現・非実現を表わし、動作的な意味の様相を伴う、アクチュアルな用法としての実現可能文に二分され、次の(1)と(2)はそれぞれ潜在可能文と実現可能文に相当する<sup>1</sup>。

- (1) a. この野菜は生で食べられる。  
b. 私は納豆が食べられる。  
(2) a. 三年かかってやっと長編小説が書けた。  
b. 新婚旅行に憧れのイタリアへ行けた。

本論は、「一回的な行為の実現を表わす」実現可能文を考察対象とし、潜在可能文を対象から除くこととする。

実現可能文について、従来、動作主体の意図的行為や期待する行為の実現を表わす構文であると論じられてきた。例えば、奥田(1986)は「スルコトガデキタ」という可能表現の過去形について、「過去における動作・状態の実現」を表現するとし、この実現は、人間が動作・状態を意識的に作り出す、ということと関わっていると指摘している。また、尾上(1998-99)と川村(2012)はいわゆる実現可能文を「意図

---

<sup>1</sup> 可能表現の分類として、ある動作を行うことがなぜ可能・不可能であるのかという、可能の条件を基準に、「能力可能」と「条件可能」に分けることもある。

成就」と名づけ、「やろうとしてその行為が実現したこと」、すなわち「意図した行為の意図どおりの実現」を表わすとしている。

(3) 太郎ががんばって、首尾よく持ち上げられた。  
(尾上 (1999))

(4) 今朝は、目覚まし時計なしでも朝六時に起きられた。  
(川村 (2012))

そして、「意図成就」(=実現可能文)の否定文については、現実における一回的な行為の不成立を表す場合は「やってみたが、意図どおり実現しなかった」という〈意図不成就〉を述べていると指摘している。

(5) 煎餅が食べられなかった<sup>2</sup>。(尾上 (1998))

(6) この魚は焼いても食べられなかった。  
(川村 (2012))

しかし、次の(7)のように、「妻にたいしての侮辱を許す」は主体が意図的に行おうとすることとは考えにくいため、果たして実現可能文の否定形が表わすのは、ただ肯定形の意味を否定するだけの意味合いになるのだろうか、再検討する必要がある。

(7) とにかく妻の誕生石として買いあたえた指輪を息子が勝手に質入れした件は不愉快だった。妻にたいしての侮辱が許せなかった。馬鹿め！理一はなんども心のなかで呟いた。(立原正秋『冬の旅』)

---

<sup>2</sup> 尾上 (1998) は、この場合は「意図したが起こらなかった=現実界不成立」を表わすと説明している。

そこで、本論は、実現可能文の否定形の表す「不可能」の内実を考察した上で、肯定形との関わりを明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究と問題点

まず、現代日本語の実現可能文に関する研究を概観し、問題点を整理しておく。

日本語の実現可能文に関する先行研究として、奥田（1986）、渋谷（1993）、尾上（1998－99）、川村（2012）が挙げられる。

まず、奥田（1986）は、「することができた」という実現可能文の肯定形は「過去における動作・状態の実現」を表現するとし、この実現は、人間が動作・状態を意識的に作り出す、ということと関わっていると指摘した。また、その文法的な意味について、「/意図的につとめて実現する/と/状況のはたらきかけで実現する/との、ふたつの意味上のヴァリエーションをもつことになるのだが、このような分化も絶対的ではない。（中略）文のなかでおこってくる、意味のうえでの、こまかいちがいをきりすてるとして、『することができた』という、過去のかたちを述語にする文は、その文法的な意味を/期待する、意図的につとめる動作・状態の実現/というふうに規定しておいていいのだろう」と述べている。また、奥田（1986）では、実現可能文の否定形「することができなかつた」について、以下のように記述されている。

このかたちを述語にする可能表現の文のほうは、きまりどおりに《非実現》を表現している。/期待し、意図的につとめる動作・状態が実現しない/という意味をいいあらわしている。この非実現も、能力がかけているためであったり、条件がさまたげるため

であったり、両方であったりするが、この事情は、  
おおくのぼあい、文脈のなかで判断しなければならない。

(奥田 (1986 : 200))

そして、渋谷 (1993) は、「実現系の可能は、様々な条件によって、ある動作を実現することが可能・不可能である・あったことを表わす」としている。そして、「ある動作が可能である」というときの「ある動作」について、「『ある動作』とは、常に話し手が期待する (待ち望む) 動作、より正確には、動作主体が期待している (待ち望んでいる) であろうと話し手が考える動作でなければならないということである」と説明している。つまり、実現系の可能表現の否定形は、動作主体が待ち望んでいる動作が実現しなかったことを意味する、ということになる。

一方、尾上 (1998-99) は、「この煎餅はゆっくり噛めば食べられる」のような、いわゆる潜在可能文を「可能」と扱い、「大丈夫かなと思ったが、食べてみたら食べられた」などのような、実現可能文について、「やろうとしてその行為が実現した」こと、すなわち「意図した行為の意図どおりの実現」を表わし、許容性、萌芽の有無を問題にする可能とは遠く離れているため、「可能」の語を含んで呼ぶことは避けるべきであると指摘し、「意図成就」と名付けた。また、川村 (2012) は尾上氏と同じ立場にたち、「意図成就」を「行為者が実現を目指して仕掛けた行為が、行為者の意図どおり実現する」と定義した。そして、「この魚は焼いても食べられなかった」のような、現実における一回的な行為の不成立を表す場合について、次のように指摘している。

この場合は直接には「やってみたが、意図どおり実

現しなかった」という〈意図不成就〉を述べている  
というのが正しい了解だろう。「ある行為を試みた  
が、意図どおり実現しなかった」ということは、容  
易に「当該行為が実現するだけの許容性、萌芽がこ  
の状況に欠けていた」ということを想像させる。

(川村 (2012 : 189))

確かに、次の(8)と(9)の場合は、「涙をおさえきる」  
と「コアラを買う」は主体が意図的に行なおうとする行為と  
して想定できるため、否定形は「事象は主体の意図どおりには  
実現しなかった」ことを表わすと思われる。

(8) 歌っているうちに、私は感動に溺れそうになった。  
拍手が嵐のようにおこり、アンコールの「うまや  
のいえずす」を歌い出した時、それが甘い子守歌  
のような民謡だったので、私は涙をおさえきれな  
かった。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)

(9) 「コアラはすてきね。私ほしいな、と思ったこと  
あるんだけど、高いから買えなかったの」(曾野綾  
子『太郎物語』)

しかし、次の(10)のような場合は、主体が意図的に彼女の  
顎や首に贅肉や皺のきざしを感じようとするのが考え  
にくく、(11)の「加藤さんを許す」は主体の本意ではない  
ということが明らかであるため、果たして実現可能文の否定  
形の意味は「主体の意図的行為の非実現」としか考えられな  
いのか、疑問に思われる。

(10) どうかしたはずみに彼女の動作や表情のかげには  
いきいきしたものがひらめいた。彼女が腕をあげ



たり、体をうごかしたりすると、おちついたドレスのしたでひどく敏捷な線が走るのにぼくは気がついた。彼女の顎にも首にも贅肉や皺のきざしはほとんどといってよいほど感じられなかった。(開高 健『パニック・裸の王様』)

- (11) 私の頭に血が逆上した。けれど、私の頬はもしかすると蒼ざめたかも知れない。私は、加藤さんを許せなかった。五来さんを今まで独占し、そして彼を、私の存在のない世界に遊ばせたということだけで私は加藤さんを怨んだ。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)

このように見てくると、従来の研究では、実現可能文（に相当する文）は動作主体の行為の実現を表わす表現であり、実現された行為は主体の意図に基づいてまたは期待して行なうものである。それに対して、否定形の場合は、主体の意図に基づいてまたは期待して行なう行為が実現しなかったという意味を表わす構文であるとされてきた。しかし、以上のことは、実現可能文の否定形を考える時には、「意図不成就」といったような、肯定形の意味「意図成就」を否定するという説明だけでは十分とはいえない、ということを示している。そこで、本論では、事象のあり方と主体の意図との関係から、実現可能文の否定形の意味を考察し、「不可能」の内実を検討する。

### 3. 実現可能文の否定形の意味について

#### 3.1 意味パターン①－〈意図的行為の不成立〉

まず、いわゆる「意図不成就」を表す実現可能文の例を挙げる。

- (12) 夕方まで我々の搜索は続いたが、何の手がかりも得られなかった。しかし、見つからなかったといっても、私はたまちゃんの話がウソだとか勘違いだろうなどとは思っていない。たまちゃんが見たというからには、きっとたまちゃんは見たのである。(さくらももこ『あのことろ』)
- (13) おばさんは「あらあら、ママは二匹でボクは一匹もとれなかったんだね。残念残念」と言いながら残念賞の金魚をビニール袋に入れてくれた。(さくらももこ『さくら日和』)
- (14) 「そうか、僕らがやろうとしてやれなかったことが、ようやく実際に行動に移せるようになったのかー」(山崎豊子『白い巨塔 (四)』)

(12) の「手がかりを得る」と (13) の「金魚をとる」は、前後に続く文の内容からわかるように、それぞれ搜索と金魚すくい目的であり、実現可能文の否定形は主体の意図的行為の非実現を表す。また、(14) は「やろうとして」という文中の表現から主体が意図的にその行為を行なうことを意味するため、否定形は事象が結果的に主体の意図通りには実現しなかったことを表すのである。次の例文も同じように説明できる。

- (15) 私はその日、公園で出会った、近所に住む顔見知りの青年に連れ去られるようにして軟禁され、しばらく家には帰れなかったのです。(吉本ばなな『体は全部知っている』)
- (16) 夜の天井は星屑であり、下には不動の暗黒があった。この暗黒が本当に太平洋であるかどうかは見極められなかった。(藤原正彦『若き数学者のア

メリカ』)

- (17) 結局、なぜ今、日本人は不倫なのか、という外人記者の質問に私はきちんと答えられなかった。  
(森 瑤子『ハンサム・ウーマンに乾杯』)

(15) (16) (17) の「帰る」「見極める」「きちんと答える」は、いずれも動作主体の意図的行為であり、実現可能文の否定形は事象が主体の意図通りには実現しなかったことを意味すると言える。例えば、(15) は「軟禁され」ている主体の「私」の状態から考えると、「帰る」ことは当然主体の望むことであり、否定形の「帰れなかった」は望ましい行為が実現しなかったことを表すのである。(16) と (17) も同様に、「見極める」も「きちんと答える」も主体の望んでいる行為であるため、実現可能文の否定形は主体の意図的行為の不成立を表す。

このように、このパターンの否定形は、事象の不成立が主体にとって不本意な結果であり、従来の研究で指摘されている〈意図的行為の不成立〉を表わす。

### 3.2 意味パターン②ー〈心理的拒否による事象の不成立〉

では、実現可能文の否定形は、意図的行為または望ましい事象の非実現しか表わさないのであろうか。次の例文を見ていただきたい。

- (18) 傍観者であった私にとって闘争は存在しなかったから「闘争勝利」というシュプレヒコールはあげられなかったし、あげなくて当然である。(高野悦子『二十歳の原点』)
- (19) 一度思うとその気持ちは一層つのった。自分で自分を許せなかった。自分だけ特権をふり廻してい

るのは卑怯だ。(渡辺淳一『花埋み』)

- (20) 私は急に気が緩んでぼんやりした。「どうかしたんですか、これ、戴いとくんですか」と言われ、昨日の一件を話し、「もう二度と見るのも厭だ、置いて帰る」——彼は笑ったが、私は笑えなかった。(小林秀雄『モーツァルト・無常という事』)

(18) は、主体が「『闘争勝利』というシュプレヒコールをあげようとしたが、結局それができなかった」という意味が読み取れず、むしろ最初からシュプレヒコールをあげるつもりはなかったし、あげようともしなかったのだと考えられる。また、(19) と (20) は、主体が「許す」ことや「笑う」ことを望んでいるとは考えにくく、主体の意図的行為というより、むしろ主体が最初から事象の成立を望んでいないと言ったほうが適切であろう。次の例文の適格性は、事象のあり方と主体の意図との関係を裏付けている。

- (19) ' a . 自分で自分を許せなかったし、許したくもなかった。自分だけ特権をふり廻しているのは卑怯だ。  
b . ??自分で自分を許したかったが、許せなかった。自分だけ特権をふり廻しているのは卑怯だ。

また、次の (21) (22) (23) (24) は、「話す」「受ける」「顔をあげる」「よろこぶ」といった行為の実現が許されない状況にあり、主体は何らかの心理的な要素でこれらの事象を成立させることができず、行為の非実現に至ったのだと考えられる。

- (21) 澄江は、行助は自分の母が辱しめを受けたことをやはり話せなかったのだ、と思いながら答えた。これである子は少年院行きになるのか、と思うと、心のなかからなにか大事なものが落ちて行く気がした。(立原正秋『冬の旅』)
- (22) 最初の五日はローマでぶらぶらして、六日目にヴェローナまで飛行機で行って、北イタリアの義弟たちをたずねよう。ずっとそう考えていたから、私は、唐突な彼らの招待を、すんなりと受けられなかった。なによりも荷物のことがある。(須賀敦子『こころの旅』)
- (23) 五来さんの体温の温かさが、私の愚かさを許してくれているように思えて私は顔があげられなかった。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)
- (24) 墮胎は私が自分で決めたことだ。怖かった。自分では妊娠をよろこべなかったくせに、順正がよろこんでくれないと思うことが怖かった。(江国香織『冷静と情熱のあいだ Rosso』)

(24) を例にとると、主体の「私」が墮胎を決めたことなど、「妊娠をよろこぶ」の前後に出てくる内容から判断すれば、「妊娠をよろこぶ」ことは主体の意図的または望んでいることとは考えられず、その事象の成立が許されない、または受け入れられないことだと言える。このように、実現可能文のこのパターンの否定形の意味は、主体は事象の成立を望んでいないため、最初からその行為を行おうとする意図が考えられず、〈心理的拒否による事象の不成立〉を表わすのである。以上のことから、実現可能文の否定形は、先行研究で指摘されているパターン①だけでなく、主体は何らかの事情により事象を成立させないというような場合も見られる、と

ということが指摘できる。

### 3.3 意味パターン③－〈帰結的な事象の不成立〉

次の例文を見ていただきたい。

- (25) 五来さんを鶴羽繁子にとられてしまう怖れなんか、私には全く感じられなかった。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)
- (26) 母が差入れてくれた弁当は、とても食べる気にはなれなかった。賢一郎は腕を組み眼を閉じて、石のように動かなかった。(石川達三『青春の蹉跎』)

(25) (26) の「感じる」「食べる気になる」は主体の望ましい事象かどうかははっきりせず、結果的に事象が成立しなかったことを意味すると考えられる。(25) の「私」は「恐れを感じる」ことを望んでいるとは思えず、その行為の実現が主体にとって受け入れられないようなものでもない。また、(26) の場合は、母が差し入れてくれたお弁当を食べたいかどうかはともかく、「食べる気になる」は主体が望んで積極的にしようという前提が考えられないため、否定形は事象が結果的に成立しなかったことを表わすと見なすことができる。次の(27) と (28) にも同じような特徴が見られる。

- (27) ふしぎなことに、桃子の少しやつれた下ぶくれのした頬には、涙の跡が見られなかった。いや、彼女はほそい両眼をせい一杯瞠き、こぼれでようとする涙を堪えていたのだ。(北 杜夫『楡家の人びと』)
- (28) 最近になって、ある夏、小諸を通ることがあって、記念館に寄ると、展示ケースの中にこの本があっ

て、しばらく前を離れられなかった。(須賀敦子『このころの旅』)

(27) の「頬に涙の跡を見る」は主体が意図的に行なう行為ではなく、否定形はただ結果的に涙の跡が目に入らなかったことを表わし、(28) の「展示ケースの前を離れる」は主体の望むこととしても、何らかの事情で心理的に拒むようなこととしても考えられず、その事象が結果的に成立しなかったと捉えられるのである。また、次の(29) の「忘れる」も同様に、パターン①のような主体にとって望ましい事象の不成立でもなく、パターン②のように事象の成立が許されないから不成立に至ったというわけでもない。

(29) 生き埋めになった人は、暗闇の中ではどうやら気狂いのように生きていたのに、助け出された瞬間、息が絶えることもあるという話が、私には忘れられなかった。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)

そして、次の(30) の述部には(29) と同じ動詞「忘れる」が使われているものの、主体の意図的行為であるかどうかという点で異なっている。

(30) でも、あおいのことが忘れられなかった。忘れられるかと思って最初は芽実と付き合ったんだ。こんな不純な気持ちで付き合いだしたことを芽実には詫びなければ。でも好きだったし、もっと好きになれるかもしれないと思ったのも事実だ。  
(辻 仁成『冷静と情熱のあいだ Blu』)

(30) の場合は、「忘れられなかった」の後ろに続く文からわかるように、最初はおおいを忘れるために芽実と付き合ったので、「忘れる」は意志性のある動詞とはいいがたいものの、主体が積極的にそれを実現させようとする行為として見なせるため、(29) と違ってパターン①の〈意図的行為の不成立〉を意味すると言えよう<sup>3</sup>。

このように、このパターンの実現可能文の否定形は、主体にとって〈帰結的な事象の不成立〉を表わし、主体の意図的行為の非実現でもなく、心理的な要素によるものでもない、ということが確認できた。そして、事象の不成立と主体の意志性との関係から見れば、「見る」「離れる」のような意志動詞もあれば、「感じる」「食べる気になる」「忘れる」のような意志性のないものも見られる。いずれも主体が意図的にその行為を行なおうとするのではなく、結果的にその行為が生起しなかったことを表し、実現可能文の否定形は主体の非意図的行為の不成立を表すのに用いられている。

#### 4. 実現可能文の否定形と自発表現との関わり

3 節では実現可能文の否定形の意味について考察した。その結果、実現可能文の否定形には、先行研究で指摘されてきた主体の〈意図的行為の不成立〉もあれば、主体の意図的行為ではないと思われる〈心理的拒否による事象の不成立〉と〈帰結的な事象の不成立〉もあることが明らかになった。実

---

<sup>3</sup> 「忘れる」は、現代語では「おのずと記憶がなくなる」といったような非意図的行為を表わす動詞であるが、古語（「忘る（わする）」の形）では「意識的に記憶から消そうとする（四段動詞）」といった意志動詞と、「自然に忘れる（下二段動詞）」といった非意志動詞の二通り存在する（『全訳古語例解辞典 第二版』（1996、小学館）・『広辞苑 第五版』（1998、岩波書店）を参考にした）。

例）[四段動詞「忘る」]わすらむて野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも（万葉・20・4344）



現可能文と自発表現について、従来の研究では、両構文の最も大きな違いは主体の意志性の有無にあると論じられてきた。しかし、本論の考察から見ると、実現可能文はすべて意図的行為の不成立を表すとは限らないことが明らかになったため、ここでは実現可能文と自発表現は意味的にどのような違いが見られるのか検討してみたい。

まず、実現可能文と自発表現について論ずる研究を見てみよう。尾上（1998－1999）は、「典型的自発は、主文述語で表現される限り、すべて事態が現実界で成立してしまった場合である。『こらえきれずに泣けたっけ』というのは、それを意図しなかったにも拘らず『（私が）泣く』という事態が現実界で起こったということであり、意図したか否かの差はあるものの、事態の現実界成就を表現の眼目とするという点では実現可能は典型的自発と共通である。」と説明している。つまり、両構文は主体が意図したかどうかの差はあるものの、実際に成立した事象を表わすという点では共通している、ということである。また、田口（2001）は、実現可能文と自発文をそれぞれ次頁の表1のように定義した上で、両構文の違いについて、「否定形式に肯定形式で見られない『反予想』という意味特徴がある。この『反予想』は本来、可能文の否定形式にみられた特徴で、実現するはずの状態が成立しなかった時に現れる。この特徴が自発文の否定形式に現れることによって、無意志的であると思われる経験者が意志的であるかのように振る舞う。」と指摘している。

表 1

実現可能文	動作や状態の変化を主体が意図して実現している文
自発文	経験者の意図とは関係なく何らかの状態が変化している文

(筆者が田口 (2001) の記述に基づいてまとめた。)

このように、実現可能文と自発表現のもっとも大きな違いは、行為が主体の意志性によるものかどうかというところにあると言える。しかし、前節の考察結果から分かるように、実現可能文はすべて意図的行為の不成立を表すとは限らないため、両構文の違いは「行為が意図的かどうか」だけではないと思われる。

では、実現可能文と自発表現とはどのような違いが見られるのであろうか。現代日本語における自発表現は、思考・感覚・感情の動詞がよく使われるため、ここでは「思い出す」「信じる」「感じる」を例に見てみよう。

- (31) 私は恐れるということが、どんな行為であるかを 思い出せなかった。私は無感動の世界に安心して立っていた。(曾野綾子『砂糖菓子が壊れるとき』)
- (32) 私にとっても他人事ではなかったのは、最近、知人が突然死したからである。三十二歳。大企業のエリートサラリーマン。夜中の一時頃に帰宅し、翌朝、奥さんが起こした時は布団の中で冷たくなっていたという。私は知らせを受けても 信じられなかった。(内館牧子『恋の魔法』)
- (33) その他、足だけを冷水と温水に交互に入れたりする意味不明の事もやらされたが特に効果は 感じられなかった。(さくらももこ『世界あっちこっ

ちめぐり』)

(31) (32) (33) の「思い出す」「信じる」「感じる」は主体の意図で起こせるような行為ではないため、否定形は主体の非意図的行為の不成立であり、いわゆる自発表現に近づく表現である。しかし、非意図的とはいえ、以下の例文の示すように、「自然に」「おのずから」などのような物事が自然に成就するといった意味を表わす副詞との共起が不可能であることから、事象は自然に生起しなかったとは言えないであろう。

(31') \*私は恐れるということが、どんな行為であるかを自然には思い出せなかった。

(32') \*私は知らせを受けてもおのずから信じられなかった。

(33') ??その他、足だけを冷水と温水に交互に入れたりする意味不明の事もやらされたが特に効果は自然には感じられなかった。

また、これらの表現は、次の例文の示すように、述部を「動詞＋ことができる」と置き換えられることから、実現しなかった行為は主体の意図によるものではないものの、一回的行為の非実現を表わす可能表現と見なすべきであり、自然に生起するといった自発表現ではないと言えよう。

(31'') 私は恐れるということが、どんな行為であるかを思い出すことができなかった。

(32'') 私は知らせを受けても信じることができなかった。

(33'') その他、足だけを冷水と温水に交互に入れたり

する意味不明の事もやらされたが特に効果は  
感じる事ができなかった。

このように、実現可能文と自然とそうなることを表わす自  
発表現の関係については、従来、主体の意図的行為かどうか  
という点で異なっていると論じられてきた。しかし、実現可  
能文は主体の非意図的行為の不成立を表す場合もあるため、  
両構文の違いは意志性だけではなく、事象の成立が可能かど  
うかといった事象の捉え方にあると言えよう<sup>4</sup>。

## 5. おわりに

今仁（2010）にも指摘されたように、「否定」が言語現象  
に複雑性をもたらすものであり、また否定の興味深い現象は  
統語論、意味論、語用論にまたがった問題として現れること  
が多いというのは言語学における共通の認識であろう。本論  
は、事象のあり方と主体の意図の有無との関わりから、実現  
可能文の否定形を中心にその意味を考察した。その結果、実  
現可能文の否定形の意味は、肯定形の意味を打ち消す〈意図  
的行為の不成立〉だけでなく、〈心理的拒否による事象の不  
成立〉と〈帰結的な事象の不成立〉という意味を表わす場合  
もあることが明らかとなった。本論の考察結果をまとめると、  
次の図1のようになる。

---

<sup>4</sup> 3.2 節の例文（20）の「笑える」は、「ひとりでに笑えてくる。自然  
に笑った状態になる。おかしくて笑わずにいられない。」という『大辞  
林 第三版』（2006、三省堂）の説明から、可能動詞ではなく、自発表  
現を表すものであると思われる。しかし、事象が成立しなかったこと  
を表す否定形の「笑えなかった」は、「動詞+ことができる」との置き  
換えが可能であることと、「自然に」との共起が難しいことから、自発  
表現ではなく、実現可能文と判断したほうが妥当であろう。

（20'） a. 彼は笑ったが、私は笑うことができなかった。

?? b. 彼は笑ったが、私は自然には笑えなかった。

図1 実現可能文の否定形の意味

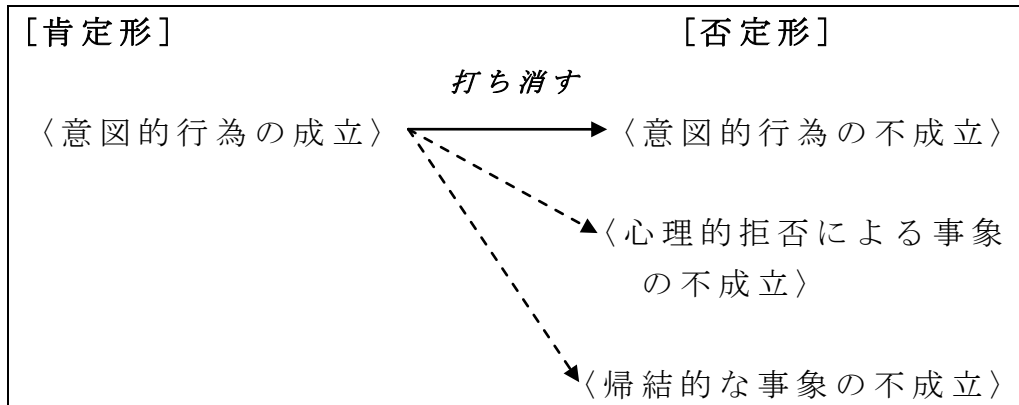


図1の示すように、実現可能文の否定形は、肯定形の意味を否定する〈意図的行為の不成立〉以外に、述部に「ない」をつけて打ち消すことによって、肯定形では表わせない〈心理的拒否による事象の不成立〉と〈帰結的な事象の不成立〉といった意味まで引き出されるのである。したがって、実現可能文の肯定形と否定形は意味的には対応していないということが明らかとなった。また、実現可能文と自発表現との関わりについて検討した結果、両構文の違いを説明する際に主体の意図的行為の実現・非実現というだけでは不十分であり、事象が実際に成立しえるかどうかといった事象成立・不成立の可能性という捉え方も実現可能文と自発表現の大きな違いである、ということがわかった。しかし、なぜ実現可能文の否定形の意味にはこのような多様性を呈しているのか、そのメカニズムを分析しなければならない。また、従来、実現可能文と自発文との関係について、自発表現が肯定に偏り、可能表現が否定に偏るといふ傾向があると論じられてきたが、両構文がどのような関わりを持っているのか、肯定形も含めてもっと厳密に検討する必要がある。今後の課題である。

### 〈用例出典〉

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』（新潮社、1995 年）

『あのことろ』（さくらももこ、集英社、2004 年）、『体は全部知っている』（吉本ばなな、文春文庫、2002 年）、『恋の魔法』（内館牧子、角川文庫、1994 年）、『こころの旅』（須賀敦子、角川春樹事務所、2002 年）、『さくら日和』（さくらももこ、集英社、2007 年）、『砂糖菓子が壊れるとき』（曾野綾子、新潮文庫、1972 年）、『白い巨塔（一）～（五）』（山崎豊子、新潮文庫、2002 年）、『ハンサム・ウーマンに乾杯』（森瑤子、角川春樹事務所、2002 年）、『ももこの世界あっちこっちめぐり』（さくらももこ、集英社、1997 年）、『冷静と情熱のあいだ Rosso』（江国香織、角川文庫、2001 年）、『冷静と情熱のあいだ Blu』（辻仁成、角川文庫、2001 年）

（実例の場合は、例文の後ろに出典を記した。出典名の無いものは作例である。）

### 〈参考文献〉

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

今仁生美（2010）「否定と意味論」『否定と言語理論』開拓社

植田瑞子（1998）「『自発』表現の一考察—自発文の二系列—」『日本語教育』96

太田 朗（1980）『否定の意味』大修館書局

奥田靖雄（1986）「現実・可能・必然（上）」『ことばの科学』1、むぎ書房

尾上圭介（1998—1999）「文法を考える 5～7—出来文（1）～（3）」『日本語学』17—9・10、18—1

尾上圭介（2003）「ラレル文の多義性と主語」『月刊言語』

Vol. 32-4

- 小川輝夫（1984）「否定表現の原理」『文教国文学』14
- 加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美編（2010）『否定と言語理論』開拓社
- 川村 大（2012）『ラル形述語文の研究』くろしお出版
- 工藤真由美（2000）「否定の表現」『時・否定と取り立て』岩波書店
- 渋谷勝己（1993）「日本語の可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』第33冊第1分冊
- 渋谷勝己（2006）「自発・可能」『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
- 田口聖子（2001）「日本語の可能・自発表現と否定形式との意味的關係」『同志社女子大学大学院文学研究紀要』1
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 中右 実（1991）「中間態と自発態」『日本語学』10-2
- 林 青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの諸相』くろしお出版

付記：本論は、台湾行政院国家科学委員会補助專題研究計画「現代日本語における否定文の研究－ヴォイスを中心に－（計画番号：NSC 101-2628-H-032-002-）」による成果の一部である。